



〒 242-0007 大和市中心林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107

電話 / Fax 046-272-8980 Email: toiwase@edventure.jp URL http://edventure.jp/

## 「越僑」ゲエン タン ティン君 と 「ナマケモノ教授」辻信一先生

「選択肢がない」ということは、つまりは閉塞的な状況にある、ということなのだろう。様々な出来事の中で、不安な状況を強く感じ取りながらも、どちらに進めば何かが見えてくるのかわからずに、ただ立ち尽くしているような気がする。そのような気分の中、Ed.ベンチャー関連の2つの事業に連続性をみた。

### ゲエン タン ティン君のこと

11月13日(日)渋谷学習センターでゲエン タン ティン君が、久しぶりの一時帰国に合わせ「社会から外される経験を声や物語にする とはなにか」という演題で講演するという話を聞いて、懐かしさ半分、のぞいてみた。相変わらずの早口で難しいテーマに正面から切り込む一方、聞き手は中学生だと思っただけで、準備されたパワポには、思いつきでドラゴンボールの絵がいたるところで使われている。映像的なセンスは抜群な彼も、スベったことに結構照れていた。

「マイノリティの人々はどうやってつながることが出来るのか」というのが、ティン君の高校生の頃から変わらないテーマだ。現在ベトナムの日系企業で働いている彼は、今回は、国民国家とグローバル経済の二つの柱の狭間に自分を置いて、様々な分析と今後の方向を模索していた。

難民として日本で生活していた彼は、中学生の時、自分と親しいベトナムの友達の多くが、非行から少年院に送られていく事実に出会う。日本社会の隅からも、外国人ばかりが滑り落ちていくのはなぜなのか。この問いの答えとして、彼は、外国人の子どもたちがお互いを支え合う集団「すたんどばいみー」を仲間とともに立ち上げた。すたんどばいみーの活動を展開する一方、彼はそれだけで満足せず、自分の感覚に合うもの、確かな手応えのあるものを探し続けてきた。筑波大を中退したあとは、まさしく傍目で見ても苦しくなるくらいの格闘であったのかもしれない。日本にあって日本人ではない自分。ベトナムという国も、ぴったりと自分の体に合うものではない。母国はもちろん世界のあちこちを旅し、その地に滞在しながら、彼はたくさんの人に出会い多くの社会を見てきた。「多様性が許される社会は存在するのか」。今回の講演では主に米国に触れていた。多様性社会を標榜しつつも、声高に「多様性の物語」を叫ばなければ崩壊しそうな危うさを抱えた国。自分のストーリーを語り続けることでのみ社会にコミットできるアメリカ社会に、「僕はきっと、住むことはないと思う」と言い切る。

生まれたときから日本人である私たちは、日本人であることに違和感を覚えることはない。それはすなわち、日本社会を受け入れ、そこに住む自分を是認することだ。しかし、日本にも、ベトナムにも違和感を感じるティン君は、自分が生きるべき社会を探し、選択しようとしてきた。だから彼は自らを「華僑」ならぬ「越僑」と称する。難民として日本で育った「ベトナム人 ゲエン タン ティン」は、自らを「越僑」と規定することで「難民」であることから抜け出したのだ。残るのは、越僑としての自己選択。

「ゲエン タン ティン」という名前でも日本国籍を取得した彼も、現在は「ハスナガ」という日本名を名乗り始めたという。ベトナムにある日系企業で働きながらも、「やはり日本人は、日本人でないと本当の意味では対等に見ない」からだという。「越僑」として、国籍も、名前もただ戦略的なものでしかない。こうした彼が住むべき国は、米国でもなく、日本でもなく、ベトナムでもないのかもしれない。彼に許されるのは、消去法での選択しかないのかもしれない。

社会から外される経験を声や物語にするとは何か。

【講演者】 ゲエン タン ティン 氏

【日時】 2016年 11月13日(日)

【会場】 IKOZA (3階 304号室)

【定員】 40名

【料金】 無料

【申込】 先着順

【お問い合わせ】 046-272-8980

グローバル企業のビジネスマンとして生きている彼は、自分に向けられる「評価」の厳しさも知っている。「あと二年くらい今の会社に勤められるといいのだけど」と思っているらしい。(1年単位の契約とのこと…大企業では、終身雇用なんてほとんど死滅していだろう。成果主義は流動性の上にこそ成り立つものだ。)そして、一方で、仲間うちのカフェをつくって勉強会を始めたそう。現在の関心は、「日本への技能研修生」。実態のあまりのひどさと、ベトナムでの日本人気のギャップに驚いているとのこと。これからはきっと、越僑グエン タン ティン君はどこにいても、社会から外される人の声を聞き取り、そして忘れてはならない物語へと編んでいくのだろう。

### 【教育講演会】 辻信一先生:シフトダウンへの冒険—「弱さ」の思想と生き方—

ティン君が講演会の中で提示した「国民国家」と「グローバル経済」の問題をもう少し掘り下げてみたい。グローバル経済の正体は、ずいぶんとはっきりしてきた。

新自由主義が世界を席卷するとき、国民国家という枠はグローバルな経済活動にとっては不自由なものでしかなかった。そして、国家はやがてグローバルな経済活動を推し進める側に自らの立ち位置を変えた。人と物と金の移動と調達をより安易に出来るようにしたのだ。グローバル経済においては、「格差」は収益につながる。通貨の格差や人件費の格差を、上手に「もうけ」に反映させるのだ。一方、国民国家は、本来はその国の国民の平等で安定した幸福を目指すはずのものであった。しかし、グローバル経済に追従する国家は、格差を是認し、温存するようになった。英国や米国で問題となっている「移民労働者」や日本における「技能研修生」はまさしくこれである。安い労働力を自国に抱えることで、企業を国内につなぎ止めるのだ。底辺層の安価な労働者は、より安価な労働者に仕事を奪われ、対立が始まる。また一方では、企業戦士たちは成果主義の中で消耗的な存在として、「有能」の尺度で存在価値を測られる。安価な労働者か、有能な消耗品か。せめて有能な消耗品であろうとする無限的競争。こうして社会の縦軸でも横軸でも分断が始まる。これが現在の「国のかたち」だ。

ヨーロッパでもアメリカでも、ポピュリズムへの警戒の声を聞く。大衆の不満を政治に利用するな…と。確かにそう。しかし、イギリスでは予想に反してEU離脱が支持され、アメリカではトランプが選挙に勝利した。ふと思う。確かにポピュリズム批判は正しそうだが、誰にとっての正しさだというのだろうか。分断社会の上からの視点ではないのだろうか。もちろん、不満をあまり、増幅させる者たちも、実は大衆の味方ではない。彼らは差別主義者だ。…かくして、大衆の思いは届かず、ねじ曲げられ、相互の分断の溝はますます深まる。排外主義がアイデンティティにすりかえられ、多様性は序列を伴うようになるのはもうすぐだ。しかし、選択肢はそれ以外になかったのである。

国民国家がその幻想を捨てたとき、我々には、新自由主義を内面化する選択肢しか残されていないのだろうか…。東北の大震災とそれに続く福島原発事故以来、私たちEd.ベンチャーの教育講演会では、「展望すべき社会のあり方」を模索してきた。それは、子どもたちに残すべき社会として、新自由主義とグローバル経済を原理とする社会への決別を決意することでもある。内面化された消費や競争や成果主義といったものさしに隠れて忘れられていた、今とは違う豊かさの感覚を、私たちは呼び戻さなければならない。

先日、教育講演会(2017年2月25日)の講師である辻信一先生を、講演会の打ち合わせで訪問した。辻先生は自らを「ナマケモノ教授」と呼ぶ。講演会のタイトルは「シフトダウンへの冒険—『弱さ』の思想と生き方—」。選択肢のなかった私たちの「新たな選択肢」となることに間違いないと確信している。

【理事の独り言】11月7日の6時間目の始まる前。クラスでは生徒会本部役員選挙の会長候補者を決める時間。でも、生徒たちが気になっているのは誰が立候補するのかではなく、アメリカの大統領選挙の行方。私が教室に入った途端に生徒が「先生、今どっち勝ってます?」と聞いてきた。その時ちょうど、社会科の先生が廊下で声を張り上げた。「え〜今、速報でトランプが逆転しました〜!」生徒たちは、「マジか、終わった。」「えっ、どうなるの?」「だってさあ、、、」と自分たちの将来の不安を語る。日本がアメリカに振り回されていることは中学生でもわかっているようだ。そして、まだ大統領ではないトランプ氏を訪問する日本の首相。そこに私たちは何を見ればいいのか。 (NA)